

2026.4.18 (土) 13:30-16:20

大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構・講義 B 棟 (2F) B218 教室

民族藝術学会 42 回大会・当番校企画 (一般来聴可・無料)

報告と対話:

「マイノリティ」と 「アート」

—— それぞれの「線引き」をこえて

何を「アート」(あるいは「芸術」)と呼び、何をそう呼ばないのかを区分する線引きは、しばしば社会的な力関係によって操作される。そのなかで、何らかの属性や状況により「マイノリティ」の立場に置かれた人々の表現活動は時に、線引きを主導する「マジョリティ」の社会にあってさまざまな困難に直面する。世界では近年、そうした状況に対する問題提起や積極的な行動が試みられる一方で、不寛容な排除の感情も広く浸透しつつあるように思われる。われわれは、そのような現実とどう向き合うべきだろうか。

問題提起 岡田裕成 (大阪大学、美術史)

報告

1. フチ(祖母)ハポ(母)からの伝承 宇佐照代 (アイヌ文化アドバイザー、アイヌ料理店「ハルコロ」店主)
2. わたしを束ねないで 上田假奈代 (詩人、NPO 法人ココルーム [釜ヶ崎芸術大学] 代表理事)
3. 少数者の音声を録音することについての省察 —音楽史・芸能史に源泉/霊性を求めた人々を事例として
鈴木聖子 (大阪大学、日本音楽史・文化資源学)

対話 宇佐照代、上田假奈代、鈴木聖子 + 岡田裕成 (司会)



宇佐照代 (うさ・てるよ)

小学生の頃、家族とともに釧路から東京へ。新大久保でアイヌ料理店を営む。祖母の記憶にもつながるアイヌの歌や踊りのパフォーマンスを通して、多様な人々と関わる活動を展開。その活動は映画「そして、アイヌ」(2024年)に描かれた。



上田假奈代 (うえだ・かなよ)

詩を仕事にして、2003年から大阪西成の「釜ヶ崎」で、喫茶店の「ふり」をしたアート NPO「ココルーム」を運営。まちを大学に見立て、そこに集まるさまざまな背景の人々とともに、創造的な活動に取り組む。2015年、芸術選奨新人賞受賞。



鈴木聖子 (すずき・せいこ)

雅楽演奏者から研究の道に。近代日本音楽史の研究を行う一方、音楽研究の前提としてなされてきた「録音」という行為、収集資料の分類や整理をめぐる制度的な問題についても取り組む。サントリー学芸賞 (2019年)、芸術選奨文部科学大臣賞 (2023年) 受賞。

*会場のアクセスマップは右の民族藝術学会ウェブサイト・大会ページからダウンロードできます。なお、この行事では聴覚に障害のある方々への字幕の提供が可能です。希望の方は右のウェブサイトの「参加フォーム」から事前にお申し込みください (一般の方の参加は無料です)

共催 大阪大学人文学研究科、同文学部、同西洋美術史研究室 (科研課題 25K03675)

